

工学部1年次生の英語実力試験結果に関する分析

山崎 大介
(工学部教養教育)

要約：この論文は、2017年度及び2018年度において、富山県立大学工学部に所属する1年次生を対象として入学時に実施された英語実力試験の結果を分析し、学生の英語力に関する状況について示すことを主たる目的としている。具体的には以下の質問に回答する：(1)2017年度と2018年度のデータには全体として差があるのか；(2)本学の学部初年次学生の英語力は平均的な大学1年次生レベルに達しているのか；(3)英語力のバランスは良いのか。結果として、(1)について、分析を行った両年度の試験結果は全ての項目（総合得点、リスニング、語彙、文法、リーディング）において統計的な有意差は見られなかった。また、(2)に関して、両年度とも受験者の過半数が大学入学時の平均値に達していた。そして、(3)では、英語のリスニング、語彙、文法、リーディングの4項目をバランス良く得点している学生に関して、上位（レベル4及びレベル5）は全体の1～2%程度、中間のレベル3においても全体の10～15%程度という結果であり、大多数の学生においてはいずれかの項目において何かしらの弱点が存在するとみられる。こうしたことから、今後は、より多角的な視点をもって、さらなる詳細な現状分析を行うとともに、得意でない部分を含め、より相対的にバランス良く英語力を伸ばせていけるような、効果的な英語教育が本学において活発に実践されていくことが期待される。

キーワード：英語実力試験、工学部1年次生、結果分析、英語技能のバランス、年度比較

1. はじめに

昨今、「グローバル人材育成」や「スーパーグローバル大学」などということが話題となり、それらに起因するかのようにならざるを得ない。また、2014年9月には、文部科学省によって設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」が、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」を発表し、今後の日本における英語教育の方針等を考える上で参考になるであろうと思われる示唆を与えた。そうした中、本学においては、筆者が着任するかなり前から約7割の学生がいわゆる「英語嫌い」と言われてきており、英語をとてども苦手としているというのが現状のようである（実際のところ、「英語嫌い」の学生はこれより少ないのではないかと推測しており、大規模な調査を改めて行う必要があると考えている）。したがって、「社会の急速なグローバル化の進展の中で、英語力の一層の充実が我が国にとって極めて重要な問題」（文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議、2014）と叫ばれる中で、本学における今後の英語教育の在り方を真剣に考えなければならない状況があると思われる。そこで、まずは、本学学生の英語力について現状を分析することが重要であると考え

るとともに、具体的には以下の質問に回答する：(1)2017年度と2018年度のデータには全体として差があるのか；(2)本学の学部初年次学生の英語力は平均的な大学1年次生レベルに達しているのか；(3)今回の試験で測定の対象とされている分野の4項目（リスニング、語彙、文法、リーディング）について、英語力のバランスは良いのか。本稿では、基本的に、富山県立大学工学部に所属する1年次生を対象として、入学時（実際には入学式の翌日）に実施された英語実力試験の結果（2017年度及び2018年度）を分析し、その結果を報告する。また、本学における今後の英語教育に関する方針等を立てる際の参考資料にしたいと考える。

2. ACEテストの概要

今回の分析対象者が受験した英語実力試験は、特定非営利活動法人（NPO）英語運用能力評価協会 ELPA（以下、「英語運用能力評価協会」という。）により開発されたA.C.E. Placement（Assessment of Communicative English-Placement）という名称の「英語プレイスメントテスト」（以下、「ACEテスト」という。）である。

このテストは、「入学時・学期初めのクラス・レベル分けに特化して開発されたテスト」（英語運用能力評価協会、(n.d.)b）で、多肢選択法によるマークシート方式を採用

した試験となっており、価格は1人当たり864円(税込)である。レベルとしては「大学入学時標準英語範囲(英検3級～英検2級/TOEIC300点台～700点程度)」(英語運用能力評価協会, (n.d.)a)を測定することができる。60分間の試験時間で行われ、全部で60問が出題される合計300点満点の構成である(表2-1を参照)。

表2-1 ACEテストの構成

分野	問題数	時間	点数
リスニング	14問	20分	100点
語彙・文法	30問	15分	50 + 50 = 100点
リーディング	16問	25分	100点
合計	60問	60分	300点

ACEテストの結果は、0～300点のスコアで表示され、そのスコアは5段階のレベルに細分化される。また、ACEテストのスコアは、英語運用能力評価協会が発行する『英語プレイズメントテスト 教授用資料 活用の手引き』に記載されている「英語プレイズメントと他のテストとの成績比較表」(以下、「ACEテストの成績比較表」という。)により、あくまでも推定値ではあるのだが、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が実施するTOEIC® Listening & Reading Test (以下、「TOEIC」という。)のスコアや、公益財団法人日本英語検定協会が行う「実用英語技能検定」(以下、「英検」という。)の級などと比較することが可能である(表2-2を参照)。

表2-2 ACEテストのスコア判定と他の英語試験レベルなどとの関係

ACE テスト スコア 判定	ACE テスト スコア 総合得点	TOEIC スコア 推定値	英検 取得者の ACEテスト 平均スコア	大学 入学時 ACEテスト 平均スコア
レベル5	300～ 256点	680～ 530点		
レベル4	255～ 226点	530～ 470点	英検2級： 240点	
レベル3	225～ 166点	470～ 375点	英検準2級： 180点	
レベル2	165～ 122点	375～ 325点	英検3級： 150点	160～ 150点
レベル1	121～ 0点	325点 以下		

表2-2に関して、例えば、レベル4というのは5段階評価(レベル5が一番高く、レベル1が一番低い)の中で二番目に良いとされているレベルで、このレベルに属す

る受験者は、ACEテストで226～255点の間の点数を獲得しており、これは、TOEICスコアに換算すると、おそらく470点から530点の間に属する可能性があるレベルということになる。また、英検におけるそれぞれの級の取得者がACEテストでどれくらいの点数を獲得しているかということについて、英検2級(高校卒業程度)の場合、ACEテストでは平均して240点、英検準2級(高校中級程度)では180点、英検3級(中学卒業程度)は150点となっている。表中の「大学入学時 ACEテスト平均スコア」とは、前述の「ACEテストの成績比較表」に記載されているもので、実際にACEテストを実施している大学の1年次生が、その大学への入学時に受験したACEテストの平均値を示すものである。

一般的に、ACEテストなどの言語テストを検証する際、考慮する必要がある重要かつ基本的な条件として、妥当性と信頼性がある。妥当性とは、「測定しようとしているものを正しく測定している程度」(竹内・水本, 2014, p.17)であり、信頼性とは、「その測定を何度やっても、同じ人には同じ結果が得られるであろう精度」(竹内・水本, 2014, p.17)と定義される。

富山県立大学では、以前より、ACEテストを例年不定期に実施し、大学入学時のクラス分けテストとしても活用していないなどを含む複数にわたる要因があることから、本学で行うACEテストの妥当性に関して検証する必要があると思われた。そこで、筆者が着任した後の2015年度より、学部1年次生全員を対象に、4月の入学時と12月に時期を固定して、ACEテストを年間で合計2回実施することが可能となり、試験結果を授業運営や学生指導等を行う際の参考資料などにすることを視野に入れ、より明確な意図をもって試験が実施されるようになったという経緯がある。

さらには、学部2年次生を対象に4月と12月にACEテストの実施、学部2年次生及び3年次生に対してTOEICの導入や受験料の補助を行うなど、この数年の間で英語の試験実施に関する整備等が抜本的に行われている。

一方、ACEテストの信頼性については、その検討材料となる信頼性係数(基本的に-1.00～+1.00の範囲)が「0.88 (α 使用)」(吉田, 2009)であり、「一般的に、言語テストの場合は0.8以上が望ましい」(竹内・水本, 2014, p.23)とされていることから、このテストの信頼性はあるとみられる。

なお、大谷ほか(2014)では、TOEIC、TOEIC Bridge、G-TELPなどを含む6つの英語テストにおける、妥当性、信頼性、実用性(試験価格、試験時間、試験結果のデータが返却されるまでの時間を考慮)を比較し、全ての条件を満たしているということから、ACEテストを採用しているという事例が示されている。

3. 結果

表3-1では、2017年度及び2018年度に本学で実施された英語実力試験の全体的な結果を示している。表中の総合得点とは、分野別スコア（リスニング、語彙、文法、リー

ディング）をそれぞれ加算して合計した点数（300点満点）のことである。受験者数に関しては、2017年度が355名で、2018年度は前年より8名少ない347名である。総合得点の平均値に関しては、2017年度が300点満点中194.75点で、2018年度は前年より1.56点低い193.19点である。

表3-1 本学学生が入学時に受験したACEテストの結果

年度	スコアの 種類	項目	受験者数 (名)	平均値 (点)	標準偏差	平均値の 標準誤差	最高得点 (点)	最低得点 (点)
2017	総合スコア	総合得点	355	194.75	31.47	1.67	300	92
2018			347	193.19	31.46	1.69	290	105
2017	分野別 スコア	リスニング	355	64.45	14.13	0.75	100	30
2018			347	63.09	13.57	0.73	100	36
2017		語彙	355	33.42	6.96	0.37	50	14
2018			347	33.47	6.68	0.36	50	14
2017		文法	355	31.76	6.60	0.35	50	10
2018			347	31.63	6.86	0.37	50	10
2017		リーディング	355	65.12	13.73	0.73	100	20
2018			347	65.00	13.76	0.74	100	28

なお、本学学生の2017年度及び2018年度のデータを、表2-2に示されている「ACEテストスコア判定」により5段階のレベルに分けたデータは、表3-2に記す。

総合得点について、2017年度は全ての受験者355名の67.3%である239名がレベル3（166～225点）であり、2018年度については347名の66.3%である230名がレベル3という判

定であった。このことから、いずれの年度も中間の得点帯であるレベル3の判定を受けている学生が6割以上を占めていることがわかる。一方、どちらの年度においても、総合得点の最も高い得点帯であるレベル5は全体の3%程度であり、最も低い得点帯であるレベル1の判定を受けている受験者については1%未満という結果であった。

表3-2 ACEテストスコア判定のレベル別受験者数とその割合

年度	項目	レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
2017	総合得点	11名 (3.1%)	46名 (13.0%)	239名 (67.3%)	56名 (15.8%)	3名 (0.8%)
2018		11名 (3.2%)	43名 (12.4%)	230名 (66.3%)	62名 (17.9%)	1名 (0.3%)
2017	リスニング	34名 (9.6%)	35名 (9.9%)	204名 (57.5%)	77名 (21.7%)	5名 (1.4%)
2018		27名 (7.8%)	33名 (9.5%)	208名 (59.9%)	73名 (21.0%)	6名 (1.7%)
2017	語彙	41名 (11.5%)	38名 (10.7%)	201名 (56.6%)	63名 (17.7%)	12名 (3.4%)
2018		39名 (11.2%)	37名 (10.7%)	204名 (58.8%)	60名 (17.3%)	7名 (2.0%)
2017	文法	23名 (6.5%)	33名 (9.3%)	219名 (61.7%)	63名 (17.7%)	17名 (4.8%)
2018		22名 (6.3%)	35名 (10.1%)	200名 (57.6%)	72名 (20.7%)	18名 (5.2%)
2017	リーディング	33名 (9.3%)	31名 (8.7%)	191名 (53.8%)	89名 (25.1%)	11名 (3.1%)
2018		35名 (10.1%)	26名 (7.5%)	182名 (52.4%)	95名 (27.4%)	9名 (2.6%)

表3-2に関連して、2017年度及び2018年度のレベル別受験者数の割合を比較したものは、表3-3に示す。この表を参照することにより、両年度を比較する上で、どの項目の、どの得点帯の受験者に変化が生じたのが把握できる。

なお、表中における数値の計算方法としては、2018年度

の割合から2017年度のものを単純に減算することにより算出している。例えば、総合得点のレベル3については-1.0%という割合が示されている。これは、表3-2において、2018年度の割合が66.3%であり、2017年度は67.3%であるため、 $66.3\% - 67.3\% = -1.0\%$ という計算により算出したものである。

また、表3-3において最も高い数値は文法のレベル3で、-4.1%となっている。これは、表3-2において、2018年度が全受験者347名の57.6%である200名が文法項目でレベル3の判定を受けており、2017年度については全体355名の61.7%である219名が同様にレベル3であった。したがって、 $57.6\% - 61.7\% = -4.1\%$ となっている。

表3-3 ACEテストのレベル別受験者数に関する割合の年度比較 (2018年度から2017年度を減算)

項目	レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
総合得点	0.1%	-0.6%	-1.0%	2.1%	-0.5%
リスニング	-1.8%	-0.4%	2.4%	-0.7%	0.3%
語彙	-0.3%	0.0%	2.2%	-0.4%	-1.4%
文法	-0.2%	0.8%	-4.1%	3.0%	0.4%
リーディング	0.8%	-1.2%	-1.4%	2.3%	-0.5%

4. 考察

ここでは、2017年度及び2018年度に実施されたACEテストの結果を、3つの観点において分析することとする。

4.1 各種スコアの年度比較

まず、異なる年度(2017年度及び2018年度)にそれぞれ違う対象者(工学部1年次生)に対して行われたACEテストにおける総合得点の平均値は、各々300点満点中で194.75点(2017年)と193.19点(2018年)であった(図4-1を参照)。この両年度の平均値に統計的な有意差があるかを検証するため、有意水準5%でt検定(両側)を行ったところ、 $t(700) = .659$, $p = .510$, $d = 0.05$, 95% CI [-3.10, 6.23] という結果であった(表4-1を参照)。このことから、2017年度と2018年度における総合得点の平均値には、統計的に有意な差が認められないと推定される。

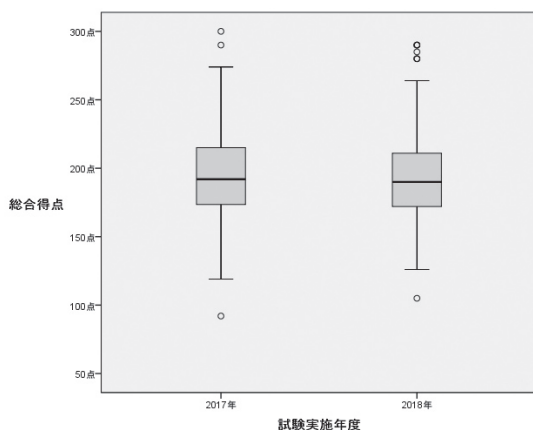


図4-1 ACEテストの結果(総合得点)に関する年度比較

また、上述の総合得点と同様に、分野別スコア(リスニング、語彙、文法、リーディング)の平均値についてもそれぞれ統計的な有意差があるかを、有意水準5%でt検定(両側)により調べた(表4-1を参照)。いずれの項目においても、2017年度と2018年度におけるそれぞれの分野別スコアの平均値には、統計的に有意な差が見られなかった。

なお、統計分析に際しては、エス・ピー・エス・エス株式会社(SPSS Japan)の統計解析ソフトウェアPASW Statistics 18(バージョン18.0.0)を使用している。

効果量に関しては、水本篤氏(関西大学外国語学部 教授)のインターネット・ホームページ上より入手可能な「効果量計算シート」([http://www.mizumot.com/stats/](http://www.mizumot.com/stats/effectsize.xls)effectsize.xls)を用いて算出している。

以上、総合スコア(総合得点)及び4つの分野別スコア(リスニング、語彙、文法、リーディング)における年度比較をそれぞれ行ったが、どの項目の平均値においても統計的な有意差は認められなかった。また、いずれの項目においても、効果量は「ほとんどなし」という状況であった。

このことから、ACEテストのスコアという数値的な観点において、2017年度と2018年度のデータには全体として差がある可能性は低いと推定できるのではないだろうか。

4.2 大学1年次生レベルへの到達度

本学の学部初年次学生の英語力が、大学への入学時点において、平均的な大学1年次生レベルに達しているかを調べるため、過去13年間分のACEテストを分析して英語力の経年変化について扱った白戸ほか(2016)を参照し、表4-2を作成した。

総合得点におけるACEテストの大学入学時点での平均値に達している本学の学生に関して、2017年度の場合は受験者355名の74.9~94.6%であり、2018年度は受験者347名の73.2~96.0%という結果であった。

なお、表4-2における「ACEテスト大学入学時平均値(13年間)」は、点数が範囲で示されている。実際、白戸ほか(2016)では、2003年から2015年までの13年間において、大学1年次生の入学時(4月)に行われたACEテストの「実施実績」がそれぞれの年ごとに記載された表がある。そして、2008年(受験者数:16,521名、平均値160点)と2015年(受験者数:11,448名、平均値171点)については同一の試験問題という記述はあるが、その他の年は異なる試験問題で行われた可能性があるため、記載されている数値を全て単純に加算してその年数で割ることは適切ではないだろうという判断により、表4-2のように13年間における最小値と最大値での範囲を示すこととした。総合得点の平均値147点については、2011年(受験者数:14,598名)の

表4-1 ACEテストの各項目における平均値に関する年度別の統計的な比較結果

項目	年度	<i>n</i>	平均値	標準偏差	平均値差	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	効果量 <i>d</i>	差の95%信頼区間	
総合得点	2017	355	194.75	31.47	1.56	<i>t</i> (700)=.659	<i>p</i> =.510	<i>d</i> = 0.05	-3.10	6.23
	2018	347	193.19	31.46						
リスニング	2017	355	64.45	14.13	1.36	<i>t</i> (700)=1.30	<i>p</i> =.194	<i>d</i> = 0.10	-0.69	3.42
	2018	347	63.09	13.57						
語彙	2017	355	33.42	6.96	0.05	<i>t</i> (700)=.097	<i>p</i> =.923	<i>d</i> = 0.01	-1.06	0.96
	2018	347	33.47	6.68						
文法	2017	355	31.76	6.60	0.13	<i>t</i> (700)=.255	<i>p</i> =.799	<i>d</i> = 0.02	-0.87	1.13
	2018	347	31.63	6.86						
リーディング	2017	355	65.12	13.73	0.12	<i>t</i> (700)=.120	<i>p</i> =.905	<i>d</i> = 0.01	-1.91	2.16
	2018	347	65.00	13.76						

データであり、この13年間で最も低い点数であった。一方、平均値の174点については2009年（受験者数：23,963名）の点数であり、13年間で最も高い数値であった。

本研究の英語実力試験結果と比較する上で、全国的な大学1年次生の英語力に関するレベルというものを明確に定義することが現実的には難しいため、便宜的にACEテストの大学入学時平均値という視点から絞った場合、絶対なものではなくあくまでも参考としてではあるが、本学学生の英語力の状況をわずかながら垣間見ることができるのかもしれない。しかし、白戸ほか（2016）のデータが日本全国の大学生全てのデータではなく、毎年、全国で約60万人近くいる大学への入学者の一部が受験した試験の結果であるということなどを留意しておかなければならない。

表4-2 ACEテストの全国平均値と本学学生の到達者数

項目	ACE テスト 大学入学時 平均値 (13年間)	本学学生 (2017年度) の到達者数と 受験者355名 に占める割合	本学学生 (2018年度) の到達者数と 受験者347名に 占める割合
総合得点	147~174点	336~266名 (94.6~74.9%)	333~254名 (96.0~73.2%)
リスニング	49~60点	318~229名 (89.6~64.5%)	310~203名 (89.3~58.5%)
語彙	24~31点	332~232名 (93.5~65.4%)	327~230名 (94.2~66.3%)
文法	24~31点	328~225名 (92.4~63.4%)	319~214名 (91.9~61.7%)
リーディング	45~57点	336~255名 (94.6~71.8%)	332~243名 (95.7~70.0%)

4.3 英語力のバランス

ACEテストで測定する対象となっている分野は、リスニング、語彙、文法、リーディングの4項目である。当然、英語力のバランスを考えると、これら4項目全てにおいてACEテストスコア判定（表2-2を参照）のレベル4もしくはレベル5を獲得しているというのが理想的であり望ましいであろう。しかし、表4-3及び表4-4で示されているとおり、今回の分析対象である試験結果では、2017年及び2018年の両年度においてそうした受験者がほとんどいなかったため、その割合は両レベルを合計してもそれぞれ1~2%程度（レベル5は2017年が0.8%で2018年は1.2%、レベル4は両年度とも0.3%）である。また、中間のレベル3についても全体の10~15%程度（2017年が12.7%、2018年は15.6%）という結果である。つまり、英語のリスニング、語彙、文法、リーディングの4項目において、何かしら他よりも得意ではないものが含まれている可能性があることを意味する。こうしたことを考慮すると、自分の弱点や苦手としている分野を自分で選択して受講できるように授業体系やクラスなどがカリキュラム等の中に設定されていると、学習者にとってより有益であるのかもしれない。

表4-3 同一レベルを取得した受験者の割合（2017年度）

	同一 レベル	レベル 5	レベル 4	レベル 3	レベル 2	レベル 1
4項目	0.8%	0.3%	12.7%	0.8%	0.0%	
3項目	0.8%	0.8%	35.5%	6.5%	0.3%	
2項目	7.3%	4.5%	27.0%	15.5%	2.0%	
1項目	16.3%	25.9%	18.3%	28.5%	7.9%	
0項目	74.6%	68.5%	6.5%	48.7%	89.9%	

表4-4 同一レベルを取得した受験者の割合 (2018年度)

同一レベル	レベル5	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
4項目	1.2%	0.3%	15.6%	1.7%	0.0%
3項目	1.7%	1.2%	32.0%	7.5%	0.6%
2項目	3.5%	6.1%	26.8%	14.1%	0.9%
1項目	18.7%	21.0%	17.0%	28.8%	8.1%
0項目	74.9%	71.5%	8.6%	47.8%	90.5%

5. まとめ

以上、本学の工学部1年次生が入学時に受験した英語実力試験の結果を分析することにより、以下の3点を見出すことができた。

- 2017年度及び2018年度における全体的な試験結果を比較すると、全ての項目（総合得点及びリスニング、語彙、文法、リーディング）において、統計的な有意差が認められないということ
- 一般的な大学1年次生レベルの英語力を定義することが難しい中で、他の研究者等が報告している過去13年間におけるACEテストの実施実績を参考とするならば、決して一概にそうとは言い切れないかもしれないが、本学学部1年次生の過半数は入学時点で平均的な大学初年次学生の英語力レベルに達していると推測されるということ
- 英語のリスニング、語彙、文法、リーディングの4項目全てにおいて英語力のバランスが良い学生は、上位レベルで全体の1～2%程度であり、中間レベルの学生では全体の10～15%程度であるということ

今回の試験結果だけにより、本学学生の英語力並びに本学における英語教育などに関することの全てを把握できるわけではないということは当然である。しかしながら、数値的なデータを分析することにより、本学学部1年次生の英語力に関する状況を垣間見ることができる。状況をしっかりと見極め、本学で行われる英語科目の授業などを、着実に、確実に、学生にとって実りある成果が出るような方向に導いていかなければならない。その実現に向けて、より多角的な視点をもって、さらなる詳細な現状分析などを行うとともに、今後の本学英語教育の方向性を真剣に考え、慎重に行動していかなければ何の進歩もないであろう。さらなる本学英語教育の発展を期待してやまない。

引用・参考文献

- 英語運用能力評価協会 (n.d.)a. 「英語プレイスメントテスト」特定非営利活動法人 英語運用能力評価協会 ELPA.
<http://npo-elpa.org/placement/>
 (参照 2018年11月20日).
- 英語運用能力評価協会 (n.d.)b. 「ELPAのテスト『大学向け英語テスト』」特定非営利活動法人 英語運用能力評価協会 ELPA.
<http://npo-elpa.org/test/> (参照 2018年11月20日).
- 大谷麻美・横山仁視・ブラッドフォードワッツ キム (2014). 「プレースメントテストによる習熟度別クラス編成に関する報告書—全学共通言語コミュニケーション科目の英語における事例—」『京都女子大学人文論叢』第62号, pp.27-50.
- 垣田邦子・バデューチ D.・中寫崇・須田孝司 (2011). 「新英語教育カリキュラムの素案の開発に向けて—英語実力テストおよび英語に関するアンケート調査の結果より—」『富山県立大学紀要』第21巻, pp.26-35.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018). 「TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2018 2017年度 受験者数と平均スコア」一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会.
https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf (参照 2018年11月21日).
- 清水裕子 (2003). 「プレイスメント・テストの結果分析—今後の課題にむけて—」『立命館言語文化研究』第14巻, 第4号, pp.181-188.
- 白戸治久・中村洋一・清水裕子 (2016). 「<英語プレイスメントテスト> 13年間の分析と英語力の経年変化」『ELPA VISION』No. 1, 第2版, pp. 3-9.
- 竹内理・水本篤 (編著) (2014). 『外国語教育研究ハンドブック 研究手法のより良い理解のために【改訂版】』松柏社, 380ページ.
- 寺内正典 (編集代表)・中谷安男 (編集) (2012). 『英語教育学の実証的研究法入門 Excelで学ぶ統計処理』研究社, 252ページ.
- 日本英語検定協会 (n.d.). 「各級の目安」公益財団法人 日本英語検定協会.
<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/about/>
 (参照 2018年11月20日).
- 平井明代 (編著) (2012). 『教育・心理系研究のためのデータ分析入門 理論と実践から学ぶSPSS活用法』東京図書, 272ページ.
- 三浦省五 (監修)・前田啓朗・山森光陽 (編著)・磯田貴道・廣森友人 (著) (2004). 『英語教師のための教育データ分析入門 授業が変わるテスト・評価・研究』大修館書店,

192ページ.

水本篤・竹内理 (2008). 「研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—」『関西英語教育学会紀要 英語教育研究』第31号, pp.57-66.

水本篤・竹内理 (2011). 「効果量と検定力分析入門—統計的検定を正しく使うために—」『より良い外国語教育研究のための方法』外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 メソドロジー研究部会 2010年度報告論集, pp.47-73.

文部科学省 (n.d.)a. 「平成15年度学校基本調査 調査結果の概要 (高等教育機関) 学校調査」文部科学省.
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04011501/002/001.htm#1 (参照 2019年1月6日).

文部科学省 (n.d.)b. 「学校基本調査—平成20年度 結果の概要『調査結果の概要 (高等教育機関)』」文部科学省.
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/17/1278417_2.pdf (参照 2019年1月6日).

文部科学省 (n.d.)c. 「学校基本調査—平成25年度 (確定値) 結果の概要—『調査結果の概要 (高等教育機関)』」文部科学省.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2013/12/20/1342607_3.pdf
(参照 2019年1月6日).

文部科学省 (n.d.)d. 「学校基本調査—平成30年度結果の概要—『調査結果の概要 (高等教育機関)』」文部科学省.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_3.pdf
(参照 2019年1月6日).

文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議 (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」文部科学省.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
(参照 2018年11月21日).

吉田弘子 (2009). 「英語プレイスメントテスト分析—言語テストの観点から—」『大阪経大論集』第60巻, 第2号, pp.93-103.

謝辞

本研究は富山県立大学の平成29年度及び平成30年度 学長裁量経費における⑤特別経費の B 学長特認経費「すでに定着した教育プログラムの推進」の助成を受けたものである。

An Analysis of English Proficiency Testing Results Collected from First-year Undergraduate Students at an Engineering College

Daisuke YAMAZAKI

Department of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

Abstract:

This paper aims to investigate and analyze the results of an English proficiency test (the “Assessment of Communicative English Placement” test or “ACE test” for short) conducted on separate first-year engineering undergraduate students at Toyama Prefectural University (TPU) in 2017 and 2018, and to present a comprehensive overview of the students’ English-language skills. Specifically, the study attempts to resolve the following research questions: (1) Is there any difference between the data for 2017 and that for 2018? (2) Do the TPU students reach an average national level of English proficiency? (3) What is their balance of language skills? Firstly, it was found that there were no statistically-significant differences between the two groups (year 2017 vs. year 2018) in either total score or in any of the four section scores (listening, vocabulary, grammar and reading). Regarding the second question, it seems that more than half of the students in each group reach the mean level of English proficiency demonstrated by other first-year undergraduate students in Japanese universities. As to the third question, only one or two percent of the advanced-level students show a clearly well-balanced ability in the four areas, while 10% to 15% of the intermediate-level ones are at *Level 3* out of five grades in the four domains; thus it appears that the great majority exhibit some weakness in at least one area of language skills. Therefore, it is necessary to analyze the situation from a multilateral perspective, in order to delineate appropriate measures for the advancement of English education at TPU.

Key Words: English proficiency test, first-year engineering undergraduate students, result analysis,

well-balanced ability in four aspects, year-to-year comparison